

## 多様なる知識人・加藤周一

『加藤周一 或いは文化多様性についての考察』CNRS出版2012年1月

*Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, CNRS Éditions, Paris, janvier 2012.

杉淵 洋一

2008年12月5日、戦後日本の知識人の世界を長きにわたって牽引してきた加藤周一が、多臓器不全によって八十九年の人生に幕を下ろしたことは、広く巷間に知られたことであろう。その加藤の死から一年と一週間を経た2009年12月12日、フランス・パリの日本文化会館La Maison de culture de Japonにおいて、「加藤周一 或いは文化多様性の考察」《*Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*》と題された国際シンポジウムが、約三百人の聴衆を集めて開催されている。

2007年、このシンポジウムのオーガナイザーを務めることになるジャン＝フランソワ・サブレ Jean-François Sabouretは東京の加藤を訪れ、加藤の最後の著作となった『日本文化における時間と空間』<sup>1</sup>のフランス語訳の許諾をとりつけている。その際、そう遠くはない死期を悟っていた加藤が、最後のフランス訪問を実現したいという思いを語り、サブレ氏はそれに応える形で、CNRS(国立科学研究中心)出版からの刊行の曉には、加藤を呼んで記念の講演会を催す約束を交わしていた。しかし、翌年の加藤の死によって、この機会は永遠に奪われることになる。

加藤はこの世を去ったものの、翻訳計画が頓挫することではなく、2009年11月、『日本文化における時間と空間』は *Le temps et l'espace dans la culture japonaise*<sup>2</sup> の仏題でフランスの書店に並ぶ運びとなる。サブレによって、最後のフランス訪問の夢を果たせずに鬼籍に入った加藤への追悼と、フランスにおける仏訳書籍の刊行を記念して企画されたのが上記のシンポジウムである。二部構成で行われたシンポジウムにおける発表者の報告、報告後の質疑応答を第三部とし、さらにジュリー・ブロック Julie Brock氏による序文

*Introduction* を加え、シンポジウムと同じタイトルで2012年1月にCNRS出版からフランス語で上梓されたものが、本レヴューで扱う書籍 *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle* (『加藤周一 或いは文化多様性の考察』)<sup>3</sup> になる。

該当書籍の構成については以下のとおりである。

### 目次

Sommaire ..... 7

### 緒言

Avertissement ..... 9

### イントロダクション

Introduction  
(ジュリー・ブロック Julie Brock) ..... 11

### 執筆者紹介

Présentation des auteurs ..... 27

### 【第一部 Partie I】

#### 加藤周一作品における時間と空間

*Le temps et l'espace dans l'œuvre de Katô Shûichi* ..... 33

#### 参画する知識人・加藤周一

*Katô Shûichi, un intellectuel engagé*  
(ジュリー・ブロック) ..... 35

#### 日本の時空間について

*Quelques mots de l'espace-temps nippon*  
(オーギュスタン・ベルク Augustin Berque) ..... 45

私が加藤周一に負うところ : 1950年代のポール・クローデルの演劇世界からの啓示

*Ce que je dois à Katô Shûichi : la révélation de l'univers dramatique de Paul Claudel en 1950*  
(渡邊守章) ..... 53

啓蒙とは何か？：ある普遍的知識人のエートスについて	
Qu'est-ce que les Lumières ? : sur l'éthos d'un intellectuel universel	
(石田英敬) .....	57

#### 現前の意味

加藤周一『日本文化における時間と空間』についての考察	
Le sens de la présence.	
Réflexions sur <i>Le temps et l'espace dans la culture japonaise</i> de Katô Shûichi	
(ピエール・ケー Pierre Caye) .....	63

#### 【第二部 Partie II】

加藤周一とその時代	
Katô Shûichi et son époque .....	71

#### 第二部への問題提起

Présentation de la deuxième session	
(坂井セシル Cécile Sakai) .....	73

日本文化における時間と空間についての概念：加藤周一における「今=ここ」—文化人類学見地からの考察—	
La conception de l'espace et du temps dans la culture japonaise : «ici et maintenant» chez Katô Shûichi. Réflexions à partir d'une perspective anthropologique	
(大貫恵美子 Emiko Ohnuki-Tierney) .....	77

#### 循環する時間と非可逆的な時間

Temps circulaire et temps irréversible	
(エドガール・モラン Edgar Morin) .....	83

異端者、敵、友、同伴者、親類：オセアニア的視点	
Etranger, ennemi, ami, co-initié, parent : un point de vue océanien	
(モーリス・ゴドリエ Moris Godelier) .....	89

#### 「今=ここ」：意識の決定

«L'ici et maintenant» : une décision de la conscience	
(桜井均) .....	95

#### 【第三部 Partie III】

質疑応答	
Discussion .....	101 <sup>4</sup>



Katô Shûichi  
ou penser  
la diversité culturelle

日本文化会館におけるシンポジウムでは、第一部の冒頭に「矢島翠が語る加藤周一——ジャン=フランソワ・サブレとの対談」、第二部の初めには、「京都の加藤周一」が、瀬戸桃子制作の映画『加藤周一を語る(2009)』<sup>5</sup>より抜粋の形で上映され、第二部の終わりに報告者を務めた桜井均氏の手による映画『しかし それだけではない。——加藤周一 幽霊と語る(2009)』<sup>6</sup>の一部が上映されたとあるが、活字化される都合上、これらの映像の内容については、「イントロダクション」の部分でまとめて簡潔に説明がなされている。

映像の中で矢島翠が、加藤が《九条の会》を結成するに至るプロセスの根底として、「戦中、《マチネ・ポエティック》の仲間等と、極右軍事政権に対する不支持を明確にしていた。」<sup>7</sup>とするところは、加藤の創作活動の一貫性と根源を強く物語っていると言えよう。

ジュリー・ブロックが「参画する知識人・加藤周一」の中で、「加藤にとって最も根源的なモチベーションは、戦時に端緒を見つけることができるであろう。彼が学生だった時、ほぼ全ての同年代の若者たちが戦争に駆り出され、多くの若者はそこから戻って来ることはなかった。彼はいつも亡くなった友人達のことを考えていた。(略) 戦争で散った日本人を語りつつ、加藤は知的選択の根拠としての道徳的価値を提起する。彼は、それが戦争で生き残った者にとって、生き残る機会を逸した者たちを称えるための道徳的義務と考えていた。」<sup>8</sup>と加藤の戦後における息の長かった言論活動を追想している点は、加藤にとっての戦後というものが、戦後の日本を見ることのなかった学友たちへの贖罪の気持ちと、戦争が

生んだ悲劇の痕跡に目を瞑り、巧妙に国民を巻き込みながら再軍備の途を辿ろうとする昨今の為政者たちへの激しいアンチ・テーゼが交錯したものであったことを再認させる。

加藤の八歳下になる歴史小説家・吉村昭は、戦後、史実に拘って執筆活動を行ったことについて、ある作家が醤油を飲んで故意に徴兵を逃れたという事例を引き合いに出しながら、「しかし、そのために作家より体格の劣る素朴な一人の若者が兵隊になって、戦場へ行って戦死したかもしれないじゃないか。それは何も戦争反対ではなくて、自分が卑怯だっただけじゃないか。そのような反発を感じながら、戦後の二十年間を過ごしていたのです。そして、やっぱり少年であった私の眼で見た戦争だけは書いておきたいと思いました。」<sup>9</sup>と述べている。戦後の太陽を挾めなかった友人たちへの鎮魂、祈りの思いが、そしてそのことを後世に伝えようとする強く明確な意識が、戦争をかいぐった彼等の文筆活動には通底しており、その結果、彼らの作品自体が、何よりも散華した者たちの慰靈碑として我々の胸に迫ってくるのである。このような加藤に対する総括が、加藤の死後一年の際に開催されたシンポジウムにおいてなされた意義は大きい。

本書の【第一部】は、主に加藤の遺著『日本文化における時間と空間』を中心に、【第二部】は、加藤の生きた時代の状況が加藤の生き方にどのような影響を与えたのかについて議論がなされるとみなすこともできなくはないが、どちらかといえば、書籍全体を通して、それぞれが加藤の『日本文化における時間と空間』、ないしは書籍から読み取ることのできる世界観について論じながら、加藤の文筆活動や人生観に、一定の共通理解を見出そうとする試みであったといえよう。

第一部への問題提起となる「参画する知識人・加藤周一」のなかでジュリー・ブロックは、加藤の思考方法について、「一般的な概念、証明したい仮説と具体例の間を循環する。仮説は個別の例に基づき、個別の例の集積が仮説の証明を目指す。完全なる相互関係の中で、観察は分析を豊かにしつつ、観察されたものは統合されていく。」<sup>10</sup>とする。これが『日本文化の雑種性』以降の加藤に貫かれている《雑種性》に注目する思考方法であるとし、《人文主義》と《近代性》にこの《雑種性》が裏打ちされているという点で、加藤をディドロからサルトル

に至る系譜に接続する《参画者》とみなす。

続くオーギュスタン・ベルク「日本の時空間について」は、加藤の遺作のタイトルを引き合いに出しつつ、日本語において具体的に《空間》や《時間》を表す言葉である《間》について分析を行っている。《間》はアインシュタイン、ハイデガー以前の近代ヨーロッパにおける時空間概念の抽象化と対置するものであり、日本語の《間》という言葉が、近代性以前の人間世界における時空間についての全ての尺度の具体性(特異性)を保持していると提起する。

渡邊守章「私が加藤周一に負うところ」では、渡邊が十八歳の時、加藤が執筆した『象徴主義的風土』、『演劇のルネッサンス ポール・クローデルを繞って』という二つの文章が、ポール・クローデルの世界を本格的に研究する端緒となったことを語っている。1975年のクローデルを扱った博士論文の刊行、その後の翻訳『縞子の靴 (Le soulier de satin) (完全版)』<sup>11</sup>の出版に際しても、加藤の果たした役割が大きかったことが語られ、加藤を日本人への《啓蒙》精神の伝達者として追悼する文章となっている。

「啓蒙とは何か?」において石田英敬は、加藤を丸山眞男、鶴見俊輔などとともに福沢諭吉、中江兆民はじめ《啓蒙》の系譜に連なる知識人とし、近代性に根差した《啓蒙》の精神が加藤を《普遍的知識人》足らしめているとする。そして加藤の遺作には、加藤の「《近代人》としての姿勢」、「翻訳姿勢」、「人文主義者としての姿勢」、「倫理的姿勢」が認められ、『日本文化の雑種性』から発展してきた加藤の思考がみてとられるし、加藤の仕事は、《少数状態からの決別》を可能にする雑種化を通した普遍化の仕事であったと結ぶ。

第一部最後のピエール・ケー「現前の意味」では、『日本文化における時間と空間』において加藤が披瀝した、西洋とは逆説的に現在というものに重きが置かれたために、日本人は敗戦以降の占領政策を意図も易く受け入れ、未来に対しても楽観的でいられる、いわゆる「水に流す」という日本人の特性の根源を、禅における神秘主義的傾向や悟りに至る道に見られるような二元論の超克、つまり時間と空間の隔ての喪失、融合を企図する点にあるとし、ゆえに日本人の《プシュケ》は、類まれなる禁欲さと逃避の恍惚感の間を漂い続けるものであるとまとめる。

第二部は司会のセシル坂井も問題提起によって幕を開け、ここで坂井は、人権、平和、環境問題における偉大なる闘志たる《参画する知識人・加藤周一》のイメージを強調し、ある種のドグマに激しく反対する相対主義、理想主義が加藤の思想を貫いていたことを再確認している。

最初の報告、「日本文化における時間と空間についての概念」で大貫恵美子は、加藤の遺作の中で現在主義的なものとして展開されている日本における《時間》概念を、文化人類学の視点(日本人の信仰に対する態度)から解き明かそうとする。日本人と西洋人における死後の世界観の相違、折口信夫の《古代人の魂》に対する分析等を援用しながら、日本人は「今」、「この世界」を重要視し、一方で死後の世界には関心を払わないため、「時間について循環的な観念を持っている。」と結論づけるに至る。

「循環する時間と非可逆的な時間」でエドガール・モランは、加藤周一が、聖書に端を発しているとする、我々が置かれている西洋的な《非可逆的な時》の在り方へのアンチ・テーゼとして、太陽や月の運行、四季の移ろいに代表される《循環する時間》が重要視される伝統的色彩が強い文化への回帰を訴える。そこから、我々は個人の死のみではなく、人類、生命、宇宙の死というものに対して考え方を深めていく必要があるとしている。

モーリス・ゴドリエ「異端者、敵、友、同伴者、親類：オセアニア的視点」では、加藤の遺作の第一部「時間」における加藤の時間概念についての分類が、ゴドリエが専門とするオセアニアの社会(ニューギニヤのバルヤ族)に適応できるものかどうか検討が加えられている。仕来りや儀式によって「いま」を再生産する循環的な時間を生きてきたバルヤ族の人々が、西洋の植民地となりキリスト教化されていく事で、個人の復活が優先され、旧来の儀式を止めてしまった事象が語られる。しかし、彼らが徹底的にポスト・コロニアルな状況下に置かれた結果、逆にかつての儀式、習慣を再開していることに、《雜種性》文化の未来の姿を見出そうとする。

桜井均「「今=ここ」：意識の決定」では、九条の会を始めた頃から加藤の文章に現れる《幽霊》についての話が語られる。幽霊とは若くして戦争で散っていった友人達であり、加藤が彼等の目を通して、日本人が捨て去ることのできなかった悪しき習慣が今日の社会に再び

蔓延しつつある点を批判していたとする。そして加藤が、殺されることを自覚しているがために《今》という時間にノスタルジーを抱く源実朝、テオ・アンゲロプロスの映画『永遠と一日』<sup>12</sup>の中で、警官に捕まりそうなストリート・チルドレンを助ける老い先の短い老詩人を評価していた点は、絶望的な世界に《意味》をあたえる<sup>あと</sup>後のない《決断》によるものであったとする。そして桜井氏は、この《決断》の仕事こそがジャーナリズムであり、晩年の加藤から学んだものであったと結ぶ。

続く質疑応答では、加藤における西洋性と東洋性、別の言い方をするならばキリスト教と仏教の影響関係、日本人が持つ《時空間》への感覚などについて意見が交わされた。西洋においては、死が復活によってしか救われることのない恐ろしく無であるのに対して、東洋の仏教では、生きることは苦しみであり、再生による恐ろしい循環の苦しみから逃れることができると説かれている点などの違いを確認する一方で、エドガー・モランが、今日の世界は、脱宗教化、俗化が進み《救済》のない世の中になっているとし、「「救済無き世界において人は何が出来るか？そして人々はどのようにして人間関係を構築していく事ができるのか？」この問題について加藤周一の著作は、私達の手助けとなってくれるでしょう。」<sup>13</sup>と、加藤の世界観に我々人類の良き未来の姿を託している。

そして最後に、死が目の前に迫っていた加藤のキリスト教入信の真偽を問う質問が、ある聴衆から桜井均に対して以下のようななされる。

質問者：

これは桜井さんにお伺いしたい質問です。加藤周一は、宗教について一定の距離をとっていましたが、私は加藤が、死の幾日か前にキリスト教に入信したという話を耳にしました。このことについてどうお考えですか。

桜井：

その点は、私も同様に関心のある点です。(2008年)8月4日にインタビューを行いました。この二週間後に加藤は洗礼を受けたと聞いております。その際、加藤は、「ニュートンのおかげで地上のことは何でも物理学で説明することが可能だが、一方で、他の世界では別の杖が必要

なのだ。』と述べてありました。これはとても筋の通った話です。彼の母と妹はカトリックでした。戦前、既に彼はカトリックに関心を持っていました。

偶々ですが、私はローマ法王ヨハネ＝パウロ二世が、イラク戦争を抑止するために司教を派遣した件に関する番組に携わっていました。加藤周一は、この行動をとても好意的に受け止めていました。ヨハネ＝パウロ二世の死に際して、加藤周一にインタビューを行いました。やはり加藤は、宗教間の対話についての考えを擁護しました。しかし、この時、加藤がやがてカトリックに改宗することには気が付きませんでした。そのことについての本当の理由は、私の知るところではありません。<sup>14</sup>

イントロダクションにおいてジュリー・ブロックが、映画『矢島翠が語る加藤周一』の中で、加藤の伴侣であった矢島が「血液学を専門として医学を修めた加藤周一が、文学研究の道を志したのは、代謝機能には還元できない人間について《さらに完璧》に知るためにでした。」<sup>15</sup>と語ったとしている。加藤の回心も、《さらに完璧》に人間や世界について知るためになされた、加藤なりの死後の世界を歩くための《杖》の選択だったのではないだろうか。

(Augustin Berque, Julie Brock, Pierre Caye, Maurice Godelier, Hidetaka Ishida, Edgar Morin, Emiko Ohnuki-Thierney, Cécile Sakai, Hitoshi Sakurai, Moriaki Watanabe, *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, CNRS Éditions, Paris, janvier 2012.)

1 加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店 2007年

2 Katô Shûichi, *Le temps et l'espace dans la culture japonaise*, traduit par Christophe Sabouret (翻訳:クリストフ・サブレ), CNRS Éditions, Paris, 2009.

3 Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle, CNRS Éditions, Paris, 2012.

2012年6月末に、「パリでの国際シンポジウム「加藤周一、或いは文化多様性についての考察」を全文収録」の帯がつけられ、『加藤周一における「時間と空間』』(ジュリー・ブロック編著)の題目で邦訳の上、かもがわ出版より刊行されているが、こちらの方は、フランス語の書籍に大幅に修正、加筆、変更がなされたものであり、シンポジウムの感興が伝わってくる原書とは趣を大いに異にしている。基本的な変更点についてはジュリー・ブロックによって説明がなされているが、第一部と第二部のテーマが原著と邦訳版では入れ替わっていたり、最後に置かれた質疑応答の部分が邦訳版では全て削除されてしまっていたり、原文(フランス語)に日本語訳が対応していない箇所が多々見られ、それらの意図については判断しかねる。そこで本レビュー執筆者は、シンポジウムのタイトルや加藤周一が自著において用いている表現については、加藤の使用に従った日本語訳(表現)を用いたが、それに該当しない点については基本的に拙訳を施した。

4

« Sommaire », *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, ibid. p.7.

5

映画『加藤周一を語る』(監督:瀬戸桃子 製作:レゾー・アジー 2009年)

6

映画『しかし それだけではない。——加藤周一 幽靈と語る』(監督:鎌倉英也 製作:加藤周一映画製作実行委員会 矢島翠/桜井均 2009年)

7

Julie Brock, « Introduction », *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, ibid. pp.12-13.

8

Julie Brock, « *Katô Shûichi, un intellectuel engagé* », *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, ibid. p.38.

9

吉村昭「森鷗外、『歴史其儘』の道』『わが心の小説家たち』平凡社新書 1999年. p.16.

10

Julie Brock, « *Katô Shûichi, un intellectuel engagé* », ibid. p.42.

11

ポール・クローデル『絹子の靴(上・下)』(翻訳:渡邊守章) 岩波文庫 2006年

12

映画『永遠と一日』*L'éternité et un jour* (仏、希、伊合作 監督:テオ・アンゲロプロス Theo Angelopoulos)

13

Edgar Morin, « Discussions », *Katô Shûichi ou penser la diversité culturelle*, ibid. pp.107-108.

14

Sakurai Hitoshi, « Discussions », ibid. p.112.

15

Julie Brock, « Introduction », ibid. p.13.